

### C-3 フランスの服装造形に見る美意識について —中世ゴシックを中心として—

大分大教育 釘宮 久美

1. 激しく流動する歴史の中で、服装造形の変貌もめまぐるしい。しかし、それが生活を内在する肉体とのかかわりにおいて存在する限り、ある秩序が要求されねばならない。フランスのコスチュームは、歴史的各時代においてフォルムの変化こそあれ、感覚的に断絶がなく、独自の個性があると同時に、不易な秩序がある。その個性は何か、その秩序は何か、それは何によって培かれたものであろうか興味ある問題であった。

2. 1967年6月より1年間、パリで暮し、フランスの風土に、直接接した経験をもとに、その折コレクションした文献資料を参考にして、その美意識を、風土的、歴史的に考察したものである。

3. フランスの服装造形は、その民族の個性を、中世ゴシック期に発芽し始め、18世紀ロココ期に完成し、今尚感性豊かな造形を創造し続けていると考えられる。今回は、ゴシック期を中心として、資料を観察した。この期の服装造形は、神への信仰による敬虔の情と、人間性の肯定による豊饒な心とが、生活現実の中で、素朴に調和しながら自然なフォルムを創造したものと考えられる。